

卷頭言

退職後鴨川へ引越して続けている事の一つに水泳がある。続いている理由は健康の為。働いていた頃よりも健康は増進した。最近は二十五メートルプールをノンストップで一km以上泳ぐ。泳ぎ始めて最初の二百mぐらいは本当に辛い。クロールで泳ぐのだが、まず足が辛い、腕が辛い、呼吸が辛い。途中で休もうと思う。泳ぎに耐えているといつの間にか全てがすつと楽になる。泳ぎが楽しくなる。これはなぜか。スポーツクラブの支配人に尋ねた所、「身体がリラックスするからである」との答えだった。

この水泳での身体と心の変化は短歌の世界でも同じではあるまいか。始めたばかりの頃は良い歌を作らねばと、心身を緊張させ肩肘を張って段々と作歌する事が苦しくなる。短歌をやめようと思うのはこの時期。そこを乗り越えたと歌を創る事が楽しくなる。物を見る目の変化を自覚する様になる。この頃がリラクゼーションと言えるのであろう。泳ぎは後は体力との戦い。泳ぎながら体力維持の為に試行錯誤と精神力の持続を必要とする。短歌も又同様に更なる高みへ行く為の試行錯誤と精神力を必要とする。

太陽の舟の仲間達は皆それぞれに歌歴も違えば歌う世界も違う。私達はその事を尊しとして相互研鑽を積んでいる。入会初期の仲間は今は最も苦しい時。次の段階のリラックス後に来る停滞への恐怖と焦り。そして無意識のマンネリ。今自分は何処に居るのだろうか、常に問い続けながら作歌活動を続けて行く事が大切なのだ、毎日プールの中で考えながら手を足を動かしている。

(高崎)

太陽の舟 目次

三十一巻 八月号 (通巻二九六号)

わが愛する歌 一名歌鑑賞

庄司 久恵

卷頭言

高崎 邦彦

二十五首詠

梶川喜與志

阿部正路論 (第九十四回)

須藤 宏明

歌誌散見 (第七十回)

豊泉 豪

作品 I

湯本 いと他

六月批評 (作品 I)

佐伯 朋子

合評 (座談会)

多久和玲子

選者十首

岩橋千代子・武田 節子

秀歌抜芳 (二九五号)

森本 元昭・上田やい子

作品 II

高崎 邦彦

文法講座 (八)

玉川 愛子他

作歌の目・作歌の技法 (第五十五回)

奥田 清

歌帖余白 (六十八)

三木 勝

第十一回 太陽の舟短歌会全国大会報告

松岡 三夫

入賞者十首詠

原田 寛

題詠「海・波・砂」二首

43 39

歌会・支部報告 他

47

編集後記

50

照山・山田(紀)・松岡

阿部正路

題字

阿部正路

表紙

イラスト阿部正冬

秋 景

松 木 昭 子

黄葉の銀杏と赤きさくら葉とせめぎ合いたり鴨川沿いに

琵琶湖疎水注ぎ流れる鴨川の水清らかにもみじ映せり

大原を目指す標識現れて車の列にもみじ降りくる

敷きつめし銀杏の黄葉赤きもみじ一幅の絵なり三千院に

三千院昇るきざはし目を止む十月桜の残り花淡し

三千院石のきざはし往き来する肩の触れ合うもみじの盛り

日常を離れて佇む三千院赤き色のみ視野に入りくる

三千院あとに移動のバスの中今見しもみじ過ぎりて止まず

三千院もみじの色のままうらに揺らぎて深き眠りにつくか

春は澄み秋は深める水の色琵琶湖異なる貌をもちたり

比叡山昇りきしとき下界とは遠く隔たる気のみなぎりぬ

降りしきる落葉踏み分けゆく深山比叡山の冷気が沁みる

花びらのうすきもいろ地に触れるおとめさざんかまだあたらしき

つつましきうすもも色の香りたつ石山寺のおとめさざんか

千年紀に肖り絵巻の展示館ともみじに賑わう石山寺は

色褪せず読み継がれたる物語紫式部の彷彿とせり

行く末も読み継がれるや光源氏いま吾は吉屋信子の訳読む

春に訪いきょうはもみじの石山寺景異なりて人もそれぞれ

石山寺ふり返り今日の旅終わる忽ち昏む霜月の尽

石段の傍に苔むす水子地藏数限りなき百済寺昇る

百済寺・金剛輪寺・西明寺湖東三山もみじ深まる

濃く淡くもみじ色なす梢の間に不断桜のしらじらと見ゆ

険しくも昇りきて嗚呼無情なり湖東三山もみじに遇いて

こころよき旅の疲れに深々と身を置きてゆく最終列車

文庫本一冊携え旅終わるもみじの赤き影を曳きつつ

阿部正路論（第九十四回）

阿部正路論

須藤 宏明

—長寿者が未来を開く—

阿部正路の文学史観の特徴の一つに、天折者への視点があらう。これは阿部に内在するロマン主義文学に因るものである。これが阿部に若くして死んだという単一の現象にのみ文学的魅力を見いだしているのではない。阿部の天折者への文学的視点を支えているのは、長寿者の存在である。この阿部の重層的思念が、深い洞察をもたらしているのである。この点が、浅薄で表面しか見ていない評論家と称する存在との大きな違いである。阿部は、天折と長寿に対し、

「短歌史の場合、天折者は炎のように赤く輝き、老人は銀の重さをもって白く充たされる。

天折者と長寿者。これが短歌史をあやしく彩る二つの極北で在った。そしてこれからおそらく、二つの極北で在りつづけるだろう。（『短歌史』一一九頁・昭和五十六年桜楓社）

と説く。阿部は天折者を「炎」、長寿者を「銀」と比喻している。この比喻は何を意味するのか。それは、短歌表現における一

瞬の発見と、年月を経たがゆえの観察力を示唆しているのではないだろうか。

若さによる発見の表現とは、ほんの小さなことにでも驚きを感じ、それを感覚的に歌うことである。その代表例が石川啄木であろう。啄木は、世界のほんのちいさな事象、断片、フラグメントを、個人の小さな驚きをもって発見し、それを短歌に表した。「働けど」の歌などがそれをよく示している。それに対し、長寿者の観察とは、他者や様々な現象を自己と比較し、奥底を表現することである。その代表例は釈道空の「いまははた老いかがまりて誰よりもかれよりも低きしはぶきをする」という歌であろう。この低きしわぶきは、重い年月に沈殿した自己の労苦を、客観的に淡々と観察する視点が基盤となっている。阿部の言う「銀の重さをもって」白く充たされた歌である。この長寿者の力と役割を、阿部は、

天折した人々は、直接には歴史を拓かない。拓くのは、死者の影たる生き残った人々である。生き残って、死者の傷みが真実理解できる人びとによってのみ未来は開かれる。（同前）

と、長寿者が未来を創るという思想を提出している。「のみ」という強調表現が、まことに重みを持つ卓見である。重層的な視点は、生者は死者の影という思念である。長寿者は天折者によって生かされ、その生かされた者が未来を創るという思惟である。論理的には、天折者が生者に託して未来を創るという構造である。これが、「二つの極北」が短歌史を創り続けていくということである。

歌誌散見

第七十回

豊泉 豪

「かぎろひ」③

「かぎろひ」の○九年五月号より、短歌作品を鑑賞する。

・昨夜の夫の酔余の言に執しつ朝戸出なれば慇懃無礼に

既刊歌集『白き往還』よりの一首である。夫婦や近親間での慇懃無礼な態度ほど寒々しいものはないが、これを歌にしているということは、まだ作者の気持ちに余裕があるのだろう。犬も食わない”ことを自覚しながら、いささかユーモラスな気持ちで詠んだ一首ではないかと想像する。あるいはこの一首を得たことで、作者の夫に対する不愉快な感情はすっかり和らいだのではないかと。と、数限りない酔余の失敗を繰り返す者としては、そう願わずにいられない。

・大いなる画布に無意味な絵を書きぬ動揺を人に見られぬように
に 吉川さとる

心の動揺を他人に覺られないようにするのは難しい。日常的に絵を書いている者、多分作者自身が、日常であり無心な状態であることを装うために、絵を描くふりをした。それがことさら大きな画布であるところに却って動揺が表れているのだろうが、そこに微かなユーモアも漂っている。自らを客観視できる作者の心の余裕によるものだろう。

・除雪車とトラックの意気のあいたるを聞きつつ鯨の鱗削ぎお
り 早川 淳子

一連に「トラックの雪満載になりたれば警笛みじかに鳴らす除雪車」がある。豪雪の地方では、除雪車で雪を除けるだけではなく、除けた雪をトラックに積んで他の場所に捨てて行かなければならない。除雪車は除雪をし、トラックが雪を受けとめ、その音を聞きながら作者は鯨の鱗を削いでいる。それぞれに与えられた仕事を確実にこなしながら、一日が始まっている。確かな生活の実感を詠んだ歌である。

・たずなきなき人ら増えくると映像は語れども巡りに貧しさ見え
ず 西勝 洋一

百年に一度の不況というが、その実感の仕方は人それぞれであり、「貧しさ」の実情も昔とは大きく変化しているだろう。作者の認識に異議や不平を唱える向きもあるが、結句の「見えず」に焦点を置いて読むべき一首で、主題は「映像」＝メディア・情報と、「巡り」＝個の実感のズレにまつわる違和感を表出することにあるのだろう。短歌とは、個の実感を盛るときに大きな力を発揮する詩型で、少なくとも借りてきた社会正義を声高に叫ぶためのものではない。この歌を読み、改めてそうしたことを考えさせられた。

暖冬の年ではあったが、三月号と五月号にはやはり雪の歌が多く、極寒豪雪の地ならではの発想や生活感覚に溢れた作品が少なからず見られた。「かぎろひ」の確かな地域性と、豊かな風土性をそこに感じた。
(「かぎろひ」の項、了)

六月批評（作品Ⅰ）

佐伯 朋子

・子供らの声載せ校庭の風が舞う狩野川土手の菜の花の上に

森田 勝昭

校庭に響き合う、子供達の元気な声を載せた春風が、狩野川の土手に咲き満ちる菜の花の上を舞う様を詠まれた、伸びゆく子供達の命の讃歌であり、長閑な春の讃歌です。

・人の手の届くことなき山桜在るがまま咲き山を飾れる

森本 元昭

人里遠く山に静かに咲く、桜の美しさを詠まれた作品で、自ずから共感を覚えました。木々の緑に映えて、ひそやかに咲く山桜のゆかしい気品は、心惹かれるものです。

・舗装路切れ落葉積む上歩みたり足裏にしっとり自然はやさし

浅見 時子

狭い道路までも、殆ど舗装されている現代、土の上に積もる落葉を踏みしめた時の感触は、何かしみじみとほっとするものがあり、まさに命を育む大地のやさしさそのものと思います。人の心は自然に癒しを求め帰って行くのです。

・小ねずみの歩幅小さく塀に沿い歩く冬ざれ霧雨の降る

生稲 進

小鼠が塀に沿って歩く様を「歩幅小さく」とよく観て表現され、結句に「霧雨の降る」と詠まれて、冬のさびしさが伝わってくる、写実の利いた力量のある作品と思います。

・久びさに晴れし一日草引けば冬眠の蛙白き目をむく

込山 千代

農薬の普及により近年蛙も少なくなりましたが、春のやわらかな陽を浴びながら草を取っている時、冬眠中の蛙に遭遇された瞬間が、生き生きと詠まれていると思います。

・遠き日を思ひ出すよな風に会ふ信号待ちて夕陽を見つつ

近藤 リイ

風というものは、不思議な力を持っているもので、その瞬間の状況により、様々な想いに誘われていくものです。作者は夕陽を見ながら信号待ちをしている時、思いがけず、遠く過ぎ去った日が甦ってくるような風を感じられたのです。この作品から、私は次の歌を心に思い浮かべました。

「今しばし麦うごかしてゐる風を追憶を吹く風とおもひし」

佐藤佐太郎『帰潮』

・藤の花房耳にふるれば冷たくてささやく声すふじ色の声

庄司 久恵

詩人の心豊かな作者には、静かに揺れている藤の花房の、かすかな囁きが聞こえるのです。そしてその声に、淡い紫の幽雅さを覚えられた、作者の感性に触れた思いです。

・駅前の放置自転車ま夜深く涙のごとき露まとひるむ

末次 房江

駅前によく見かける放置自転車の、深夜の姿に想いを馳せた、作者の優しさが伝わって参ります。持主の現れない自転車の夜露に濡れた様を詠まれた、下の句が素晴らしい。

六月批評（作品Ⅱ）

多久和玲子

・「きつれがわ」「いかりがせき」と道の駅泊り重ねて桜を追

ひぬ

高崎 邦彦

先年太陽の舟の全国大会が開かれ芭蕉ゆかりの地をめぐった時の事を思い出しました。高崎先生御夫妻はお車で芭蕉や平安の歌仙とされる能因が月日をかけて廻ったこれらのところを回られたとのこと感慨ふかい旅でしたでしょう。「桜を追ひぬ」結句が決っていて感動します。

・生きたくも逝かねばならぬ人の身におもひ馳せつつ花の下

ゆく

須澤 溪子

御夫君を偲ばれての歌かと推察される。もちろん他の方のことにも及びますが、せつせつたる表現に胸を打たれますが殊に亡き人の涙のようにわが胸にふるの言葉が良い。

・人中を声高に話す人の居てケイタイ様サマ撒馬の尻尾

武田 節子

文明の利器を使いこなしていない年配の私にとってたしかに「撒馬の尻尾」といいたいところです。世間に伝えられて来た言葉を使って楽しい又考えさせられる歌を作られる作者に心から乾杯と言いたいところです。

・人去りし夕べの桜顔へるや ひと日荒れたる風も凧ぎたり

塚本 正子

日中は花をほめる声の中にいる桜自体も作者もホッとして

いることでしょう夕べの桜を詠まれた作者の優しさが見えて来て又淋しさも感じる。

・電線に害なす枝と剪られてもサクラ厨の隅にはころぶ

土橋 茂徳

剪られても連の歌作者の思い入れがふかく、感じ入りました。大事に選び厨に咲かせ又仏間飾りと作者の優しさがあふれています。又お母さんの思いを想像出来て直嬉しく思いました。

・西の空遠く見やれば黄砂立つかって幾万散りし戦さに

長須 正文

「一首入魂」をモットーとされる作者のお心の中を見せていただいた一首でした。黄砂が立てば、かの地で戦死された幾万の人たちに思いをよせられる優しい作者なのです感動致しました。

・老いて行くその一筋の細道は父母思ふ糧となりたり

二反田 實

老いに向って歩いてゆく道は父母思う糧であるという作者の気持ち嬉しくその表現の「糧」がきまっています。

春彼岸の時期、人間の生死を真剣に詠われた作者の姿勢に感じ入りました。

・天空と湖とを分かť水平線黒点となる船のゆらめき

福地 啓子

水平線の船のゆらめきに心をとめられる作者、そしてその描写を表現される繊細な心に感心致しました。黒点が決め手でした。

合評

座談会

E 合評を始めます。今回は六月号から四首を選んで行います。最初は渋谷支部の佐伯朋子会員の

慎ましきクリスマススローズの白き花寒さに耐へて咲く力秘むです。どなたからでもどうぞ。

A 作者は寒い冬の中にあっても、けなげに咲くこの花から生きる力ももらっているようで、結句に力強さを感じさせる歌いぶりで、大変良いと思います。

Q 一首を貫く控えめな慎ましい作品。クリスマススローズの清純さと寒さの中に咲いている強さが表出されていて、清らかな歌だと思えます。

H 「慎ましい」という気持と「咲く力秘む」とが重なっているような気がしますね。上句から下句に至るまで、あまりにも慎ましさを表現し過ぎて思うように思われず。

Q 一筋の思いを出そう出そうとしているような気がします。H この花が、部屋を明るくしているとか、明暗をそこへもってきたら、また別な印象の歌になったのではないかな。

E 結句が良いという意見がありましたけど、どうでしょうか。B 私は逆で、上句を生かして下句を変えたいですね。

Q そうですね。少し理屈っぽいかしら。

B うまく纏めてあるけれども、結句が少し理屈になっていくようです。クリスマススローズは多年草なので、花が枯れても地中において、翌年には花を咲かすような力を貯えるシス

テムになっているのだから、そこまで言わなくても良いと思う。むしろ、その思いを内に押えて、咲いた花の姿を詠み込んではどうでしょうか。

E では、次は品川支部の高橋和子会員の

かくれ鬼幼な籠もりし洋箏箏ナルニアへの道見つけたるやをとりあげます。如何でしょうか。

A この歌は結句が字足らずですね。

B 字足らずのところを「たらむや」と直します。すると、見つけたのであろうか、という意味になりますね。

H そう、そのほうがよいですね。

A ナルニア物語りのストーリーに沿って自分の孫とを重ね合わせて上手に歌われていると思いました。字足らずの問題さえなければ、よく短歌にしたな、と感心しました。

H 面白い歌材の取り方ですね。最初、ナルニアとは何だろうかと思いましたが、調べました。

B 短歌を読む時や歌評をする時にわからない語句があった場合、前もって調べるのが読む側の義務であり責任だと思う。

Q 洋箏箏に籠もる、とは隠れているという意味かしら。B そうです。洋箏箏がナルニア国への入口だから。

H 「かくれんぼ」としてはどうかしら。

B 「かくれ鬼」のほうが断然いいね。

A 作者はいろんな歌材を自由自在に歌われており、注目に値する会員ですね。

E 三首目は、岐阜支部の酒向一次さんの

去りし人偲べば優し鳥の声生きる力を残りしものに移

ります。如何でしょうか。

Q 去っていった人とは、この歌ではこの世から去っていった人。亡くなった人を偲んでおれば、鳥の声が優しく語りかけてくれるように聞こえて、生き残っている我等に力を与えてくれるようだ。と歌っている。歌いあげているのは、時空を越えての実在であり、亡き人と鳥の声、そして自らの存在が一つになっているように感じられます。

A 心優しい気持ち素直に歌われているとおもいますけれども、生きる力は人それぞれ何かから得ており、鳥の生で生きる力を得るといっては、私は理解しにくいです。

H 初句の「去りし人」というのは「逝きし人」か「去にし人」にしたほうがはっきりします。作者は優しい鳥の声を聞いて「生きてるのが有り難い」と思えたのでしょう。

B 作者の七首を読みますと、嚆矢の一首と掉尾の一首の「千の風」のアンチテーゼでなければ死への幻想美しすぎる と合わないような気がする。一首目に亡くなった人の優しさがどれほど虚しかったかの思いを詠まないと、掉尾の一首へつながっていかない。この作品群は七首連作として作られていますので、本来ならば問題提起をしなければならぬ 嚆矢の一首が甘いようです。

A 私自身は七首の連作を詠む時は、起承転結ではないけれども、掉尾の一首に思いを込めます。合評で掉尾の一首を取りあげられて批評されるのはいいけど、嚆矢の一首だけを取りあげての批評は、合評の限界があるような気がします。

B それは違うと思う。歌は臨機応変に批評していいと思う。

H 阿部先生も一首独立ということをやっていますね。

B 連作の場合、基本はテーマを一つに絞って歌う。前出の高橋さんの「幻」のように。酒向さんの場合は七首が連動していて、掉尾の一首に気持ちを凝縮させた作りになっているので、七首全体を詠んで批評をしています。

E 四首目で、千葉支部の上田やい子会員の

Q 風と光の迫間に桜花在るがままに咲きあるがまま散りゆく。です。どなたからでも。

Q 花季の光と風の間にはさまれたように、桜の花が在るがままに咲き、在るがままに散ってゆく。この言葉の流れのなんと幻のように美しくかないことか。作者の心に花への共感にじみ、きらめくように散っている花の様子が見えます。

A 字余りが初句からあるけれど、特に下句は八語と九語ですね。**H** 哲学的な歌ですね。「はざま」という字を調べましたら、狭間の漢字もありましたけど、この「迫間」は珍しい。

B この歌は「季と風と光」なんです。三つを同列にして、「季と風と光の迫間に桜在るがままに咲きあるがまま散る」にしてみました。下句の「に」も不用ですね。

A この一首は歌全体としては、新鮮さに欠け、ありふれた人生観となっていました。直したら歌の雰囲気はかなり違ってきましたね。

H 「の」が「と」になっただけで、すごく良くなったわ。**B** 季節と風と光と三つの条件が揃った、ぎりぎりのところで、桜が咲いている。いい歌になりました。

E 本日はありがとうございます。（記録 山田紀子）

選者 岩橋千代子

絶え間なく花びら流れる狩野川の春東の間に山青み来る
森田 勝昭

目覚むれば今日も妻との朝ありて厨に葱の刻む音する
遠藤 剛

花を愛で帰りし夜はうたかたの夢の中にも花吹雪舞ふ
木村百合子

床の中まどろみ詠みし短歌文句目覚めし朝には脳裏から消ゆ
小貴 昭

藤の花房耳にふるれば冷たくてささやく声すふじ色の声
庄司 久恵

石蹴りの白きチョークの円描かれ幼の笑ひ残りしガレージ
末次 房江

ツンと立つ髪セットする息子かな近くて遠い赤子の匂い
鈴木美智子

風に揺るるラッパ水仙 春の音をすべてキャッチするやも知れず
塚本 正子

会話なき夫婦の夕餉食卓の菜の花一輪ほのか香れる
福地 啓子

山間の風転び合う道の辺に柿の葉踏みて冬の声聞く
丸山孝一郎

選者 武田 節子

子供らの声載せ校庭の風が舞う狩野川土手の菜の花の上に
森田 勝昭

等伯の描く墨絵の雪はげし京の御寺の襖絵のなか
山田 紀子

すでに早や玉砕のごと花散りて薄くれないに水面を覆ふ
相羽 照代

満月に透く花びらの咲きこぼれ玻璃の薄さに君の息息聴く
石塚 立子

駅頭の万歳の声消えゆかず兄二人征き比島で散れり
君塚 一雄

☆花笑むも笑むなく眺めゐる人もありなむ時勢敵しく
佐田 孝義

洗足の池めぐりつつ歌詠みてころろをつなぐへ太陽の舟
須澤 湊子

「だんだん」の声わたりあふ故里の棚田に蛸蚪かよの生まるる頃か
多久和玲子

人去りし夕べの桜翹へるや ひと日荒れたる風も凪ぎたり
塚本 正子

公園にひとりの女の裸像あり裸体と見えずはだかなれども
中村 武光

選者 森本 元昭

☆通勤路この春もまた雪柳吾四十年の勤務を終える

森田 勝昭

賜りし無職の日々の予定表埋める作業のけっこう手強し

生稲 進

サムライジャパンの演じたドラマに感動の余韻を残しさく

梶川喜與志

ら散りゆく

眠ること息引き取るる夫なれど手を握りしめ旅の話しつ

河口 礼子

蛤の砂吐す音の響きるる銀のボウルに夜は更けにけり

熊谷 香織

☆花笑むも心笑むなく眺める人もありなむ時勢厳しく

佐田 孝義

人住まぬ里家の庭に水仙の白きいちりん風にゆれるし

玉川 愛子

子等の声聞こえぬ公園の静かさに介護の隙の心遊ばす

月田 藤枝

霊園にわが家の墓石どっしりと中は空室ゆっくり往かん

宮島マツエ

空気よりわずかに濃き色夫のいる部屋内みたす静かな活カ

宮原喜美子

選者 上田やい子

☆通勤路この春もまた雪柳吾四十年の勤務を終える

森田 勝昭

早春の京の御寺の本堂の冷えじんじんと背を上り来

山田 紀子

若葉マークの妻の帰りの遅き日は緑に染まりて狭庭に佇む

遠藤 剛

巧まらずも仏像を描けば亡妻に似る手を加うるをしばし迷い

君塚 一雄

なすな摘む幼の髪を乱しつつ春の疾風のふと温かし

末次 房江

生きたくも逝かねばならぬ人の身におもひ馳せつつ花の下

須澤 溪子

ゆく

玉川 愛子

十七で嫁ぎし義母は星の降る村の童女のままに老い逝きし

照山 好子

施設の名はなべて優しき十人の焼死者出せし「たまゆら」

富原 澄枝

亡き夫のネクタイ今も洋ダンスに掛かりておりぬ くれか

ら先も

丸山孝一郎

高崎 邦彦

西行が訪ふて残せし歌碑のあり秋の夕暮静かに沈む

杉山 直子

「大磯の春夏秋冬」と題する巻頭二十五首は、大磯の豊かな自然と文化の香りを詠み込んで多岐に渡る。抜芳歌は西行が「心なき身にもあはれは知られけり鴨立沢の秋の夕暮」と詠んだ「鴨立庵」のその秋の夕暮の風情を歌った。毎年三月の最終日曜日、「鴨立庵」で西行祭が取り行なわれる。今年で五十三回になるそうだ。岸田君が熱心で毎年私達太陽の舟の同人に西行祭の案内を配り、阿部先生も参加されていた。私も秋に訪れたが、国道沿いのそこに人は誰も居らず、静かに秋の夕暮を待っていた。大磯は又明治の成功者達の別荘地が多い事でも知られている。旧吉田茂邸、これは養父の貿易商吉田健三郎氏が建てたものを第二次大戦後吉田茂が使ったが、今年に入ってから焼失した。伊藤博文の滄浪閣、今は売りに出されているらしい。その外、旧安田邸、西園寺公望邸、岩崎弥之介邸等々、その外、大磯海水浴場は日本海水浴場発祥の地でありその海を、「波立ちて釣り人並ぶ湘南の磯をどこまでも夫と歩けり」と歌う。そしてその海は水平線と交わりゆっくりと船が消えてゆく海でもあった。坂田山心中事件や藤村忌など、大磯は歌人にとって魅力に富んだ地である事をこ

の二十五首詠で教えられた。

「くさり橋」ブダとベストの懸け橋のイルミネーション川面に映える

八代 陽子

昨年十二月号巻頭二十五首「娘のくれし夢」で詠んだ西欧の旅で詠んだ歌。ドナウ川はドイツの黒い森の湧水を源として黒海に流れ込むヨーロッパ第二の大河。ハンガリーの首都ブダペストは、この川を挟んでブダとベストに別れている。そしてこの街はドナウの真珠と呼ばれる程に夜景が美しいと言う。その二つの街を結ぶ橋が「くさり橋」。長い歴史の二つの街を結ぶ鎖がこの橋であればこそ「くさり橋」は重い。

春の花各々庭に咲き揃ふ一つ足りないあなたを偲ぶ

山田 玲子

それは「和やかに娘の家族らと昼食の卓を囲めり彼岸中日」の日であった。夫との思い出の花々が庭を埋め、夫が愛した娘が家族を伴って実家を探ね穏やかな昼食の卓を囲んでいた。幸せで心満たされた一日。しかし、その全てを共に作り上げた夫だけが居ない。その喪失感を「一つ足りないあなた」と表現した。夫婦はこうして二人共が死に絶えるまで決して死なない存在なのだとしみじみ実感する。

島流しにしたのは誰や戦争地図祖国に遠く遠く果てた

相羽 照代

前々号 (294号) 秀歌抜芳

「千鳥ヶ淵戦没者墓苑」は海外で死亡した日本の軍人、一般人の身元不明者の遺骨を安置する。私はこの抜芳歌の上句「島流しにしたのは誰や」の怒りに強く心を揺す振られる。地図を広げ物を配る様に外国に人間を送り出し、身元不明のまま放置した日本軍部の理不尽さは怒っても怒っても私の心に消える事は無い。そして「千鳥ヶ淵戦没者墓苑」は法的には墓ではなく「倉庫」「保管庫に」すぎないのだと言う。何と言う国であろうか。

行くあてのなく電車乗り外を見て一日つぶす 虚飾もつぶす 生稲 進

抜芳歌、結句の「虚飾もつぶす」が良い。退職をして毎日の予定が立たなくなった一種の虚脱状態。そんな時山手線は便利。時間をつぶすには最高かも知れない。作者は風景を見るようだが、私はきっと人間ウォッチング。人間の坩堝の中で人間を見るのは面白い。そして思う。もう社会的に失う物は無い。自分を飾る事は無いのだと。私もそんな瞬間があった。

母乗せてそっと押し出す車椅子小さき肩にコスモス揺れる 石田 時子

「故郷の母」と出した最初の一首だから、故郷へ行った時の母と思ひ出と読めば良いのである。車椅子の生活をしている母。秋の爽やかな一

日、母を外へ連れ出した時の一コマ。「そっと押し出す」「小さき肩」「コスモス揺れる」これ等が連動し響き合い、母に対する作者のやさしい思いが自然と心に沁みて来る秀歌。きっと母の肩も作者のやさしさに涙をこらえ揺れていたに違いない。

兼好の興ざめ想ひ網張らず啄むさまに諦めし花

奥田 清

「兼好の興ざめ」とは徒然草第十段「後徳大寺のおとどの寝殿にとびぬさせじとて縄張られたりける」を指すのであろう。五年も六年も兼好の興ざめを想い、鶉がひめこぶしを啄み、花が咲かないのを我慢していたと言う。教養とは、文学とはこの様に生活の中に生きているのだと改めて作者の人間の深さに感動を覚えた。しかし花を見たくて網を張り花を見て感激し、満足して花を鶉に供したのだった。

蛤の砂吐す音の響きゐる銀のボウルに夜は更けにけり

熊谷 香織

「砂」と題する七首。どの歌にも若者らしい視点が光る。対象物を精緻に見詰め、あるいは小さな動きに敏感に反応する。若い年代より短歌を始めた数少ない同人の感性と表現を私はいつも学ぼうと思う。そんな中で抜芳歌は不思議な透徹した

静けさを持って迫る。特に「銀のボウル」の冷たい輝やきと「更けにけり」と過去完了にして夜の深さを強く印象付けた巧みな作歌技法が冴えた。風に吹くおりおりあかあか燃えさかり古き日記は灰となりたり

黒羽 絃子

「古き日記」とは「戻らぬ日々の想い出」の詰まった日記であり、燃やすとはその戻らぬ日々の想い出を断ち切る行為であると次の歌から読み取る事が出来る。あるいはそれは夫との思い出の詰まった日記だったのか、あるいは夫が居るからこそ棄てなかった青春時代の思い出か。今作者は夫君を亡くし、何かを断ち切ろうとしている。灰になっても断ち切れない思い出があることを知りながら。

「田螺長者」なる昔話をきく朝ゆつくり時の流れゆくなり

塩田 秋子

その昔話がかつて夫と一緒に買った遠野で買った遠野弁のテープに納められている話であると言う。柳田國男の遠野物語と佐々木喜善、水野葉月の不思議な縁についてはかつて巻頭言で書いた。確かに私が行った数年前はかなり観光地化されていたが、それでも特異な空間だった。作者はこのテープを聞く度に、その空間にひたり、ゆっくりに時が流れる至福を味わう。旅の非日常が日常に

生かされた幸せである。

選ばれて傷付きながら生き給ふ阿部先生の酒を思へり

庄司 久恵

人生で初めて経験する悔しさとはどの様なものなのだろうか。作者は酒に酔う事で忘れられるのではと思った時、阿部先生の酒に思い至った。段々と先生の酒を知らない同人が増えて来た。世間では批判もあるが先生は必死で酒を飲んでおられた。正しく先生の心からいつも赤い血が流れていた様に思う。作者はその先生の有り様を見事に表現して下さった。

人去りし夕べの桜憩へるや ひと日荒れたる風も凪ぎたり

塚本 正子

桜は花の美しさや、人々の花に対する思いを歌にされるが抜芳歌の様な視点は珍しいのではあるまいか。一日荒れた風も凪いだ。しかし今夜は花見客も居ない。今頃桜は憩っているだろうかと桜に思いを寄せている。今年四月二十四日弘前城の桜は見事であったが、人出もすごかった。人を縫う様に花を見ながら、しかし私は桜の花に思いを致す事は出来なかった。改めて作者の感性に敬服する。蕉翁も訪めし古刹著我の花今を盛りと庭隅にあり

手塚ミツエ

蕉翁とは芭蕉の事。古刹とは十四段安積山の章

前々号 (294号) 秀歌抜芳

段、黒塚のある観世寺を言うか。著我は「かつみ」の事であろう。「此あたり沼多し、かつみ刈比もやや近うなれば いづれの事を花かつみとは云ぞと、人々に尋侍れども、更知人なし。」と出て来る。

作者は此等の事を知っていて「姫シャガ」(花かつみ)が今を盛りと咲いている姿に見惚れている。

海原は果てなきものかな彼の雲を追ひてはならぬと心治むる

梅野 落

作者はどこから海原を見たのであろうか。海岸からか、船が大海へ出てからか。地球の七割を占める海は真実果てしない。しかし抜芳が歌いかけたのは、海原の果にある雲であり、その流れゆく雲を追わないと心に決めた事であった。あるいは永遠に手の届かぬものが雲であり、それを追いつめる事が苦しみである事を知りぬいた作者の諦念とも受け取れる。そしてそれは決して心を満たさない事も又知っているのだ。

亡き夫のネクタイ今も洋ダンスに掛かりておりぬ
これから先も

富原 澄枝

今年も又夫の命日が巡って来る。十五年続く友人からの献花が届く。もう長く花を愛でゆく一人の旅を探して来た。子供等も父の事は語らず想い出として胸奥にしまっけて生きて行くこうとしている。去る者は日々に疎しとは忘れる事を知っている。

る人間に与えられた能力だとは思うが、しかし忘れられない悲しさも又能力なのであろう。夫の生前のよすがネクタイがこれからも存在し続ける事を諾なう事を選んだ時から。

山斜面彩とりどりの若葉色庭に腰かけお茶のむ幸せ

二宮 裕子

庭が山の斜面にあって、周囲が若葉色に満たされているのか、庭から若葉色の斜面を見ているのか、その状況によって多少の色彩感覚の違いはあるかもしれないが、しかし、その若葉色を眺めながらお茶を飲んでいる幸福感は十分に伝わってくる。今私の家の周囲も草刈りをした後の休耕田の雑草と稲の若葉色で緑一色になっている。作者の率直な述懐、「幸せ」はそのまま私の気持ちだ。

四坪ほどの春土耕せば息弾む蛙もミミズもまだ夢の中

福地 啓子

四坪と言ったらそれ程広い土地でもない。しかし、一冬耕す事をせず鍬が入っていないから土は固い。加えて久し振りであるから息が弾むのもっともの事。はあはあ言いながら土を耕している作者の心の目にまだ土の中で安眠しているミミズも蛙も見える。長く土と係わって来た作者には、当然の感覚なのかもしれないが土と遠い生活をして来た私にはとても新鮮に感じられた。

文語で短歌を詠む人のために (八)

奥田 清

(一) 動詞の活用の種類の見分け方

ある動詞が何活用に属するかを見分けるには、例語の少ない上一段・下一段および変格活用の動詞を全部記憶しておく、それ以外の動詞は、各活用の種類のところで述べたように、次の(2)の方法によればよい。

① 記憶しておくべき動詞

(1) 上一段 (九語) 「君に言ひ居る」と覚えてください。

- ① きる (着る) ② みる (見る・試みる・鑑みる・顧みる)
- ③ いる (似る・煮る) ④ いる (射る・鏝る・沃る)
- ⑤ ひる (干る・乾る・曬る) ⑥ る (居る・率る・率ある・用ゐる) 「き・み・に・い・ひ・ゐる」なので、「君に言ひ居る」と覚えよう。
- ⑦ ひる (ひる) で、クシャミをするという意味の「曬る」は上一段だが、オナラをするという意味の「放る」は四段である。で、それぞれの連用形は、「鼻をひたり」、「屁を放りたり」となる。

(2) 下一段 (一語) — 蹴る。 (3) カ変 (一語) — 来。 (4) サ変 (一語) — す (ただし、複合動詞は多い。) (5) ナ変 (二語) — 死ぬ・往ぬ。 (6) ラ変 (四語) — あり・居り・はべり・いまそかり。

② 右以外の動詞の見分け方

- (1) ア段の音に「ず」の付くものは — 四段活用。(書かず)
- (2) イ段の音に「ず」の付くものは — 上二段活用。(起きず)
- (3) エ段の音に「ず」の付くものは — 下二段活用。(受けず)

(二) 動詞のかなづかいの見分け方

動詞のかなづかいで最も誤りやすいのは、次の三つで。

- (1) 「い」・「ゐ」・「ひ」の区別
- (2) 「え」・「ゑ」・「へ」の区別
- (3) 「じ」・「ず」・「ぢ」・「づ」の区別

① 「い」・「ゐ」・「ひ」の見分け方

● 「い」と書くもの — (ヤ行) 射る・鏝る・老い・悔い・報い (五語)

● 「ゐ」と書くもの — (ワ行) 居る・率いる (率ある) (二語) それ以外で「イ」と発音する語尾は、すべて「ひ」である。

② 「え」・「ゑ」 — 「へ」の見分け方

● 「え」と書くもの。(ア行) 得・心得 (ヤ行下二段の甘え・消え・榮えなど三〇語) ● 「ゑ」と書くもの (ワ行) 植ゑ・飢ゑ・据ゑの三語、それ以外「エ」と発音する語尾は、すべて「へ」と思えばよい。

③ 「じ」・「ず」・「ぢ」・「づ」の見分け方

● 「じ」・「ず」・「ぢ」・「づ」と書くもの (サ行下二) の「混ず」、(サ変) 「論じ・論ず・応じ・応ず……」など。それ以外で「ジズ」と発音する語尾は、すべて「ぢ・づ」と思えばよい。

歌帖余白（六十八）——編集雜記——

松岡三夫

後の月という時分が来ると、どうも思わずには居られない。幼い訣とは思うが何分にも忘れることが出来ない。もはや十年余も過去った昔のことであるから、細かい事実は多くは覚えて居ないけれど、心持だけは今なお昨日の如く、その時のことを考えると、全く当時の心持に立ち返って、涙が留めどなく湧くのである。

——伊藤左千夫『野菊の墓』

伊藤左千夫は、元治元年（一八六四）八月十八日、上総国武射郡殿台村（現在の山武市）に農業伊藤重左衛門家の末子として出生。この度の全国大会で生家を訪問。父良作は、上総道学の流を汲む、この地方の優れた道学者で、和歌にも通じていた人。左千夫は幼名を幸次郎といい、末子でもあった関係で、母親に格別の愛情をもって育まれ、自由に、伸び伸びと多感な少年時代を過ごします。

『野菊の墓』は、静かな田園で、民子と征夫の間に芽生えた幼い純な恋が、世間体を気にする大人たちのために隔てられ、少年は町の中学校に行き、少女は余儀ない結婚をして間もなく世を去るという物語。ほかに『隣の嫁』『春の潮』『分家』『守の家』などの小説があります。

しかし、小説家伊藤左千夫と同時に、というより

牛飼が歌よむ時に世の中の新しき歌おほいに起る

と詠み歌人の道歩んだ伊藤左千夫がいます。明治十八年、

実業家をめざして上京し明治法律学校に学ぶが、病気になって帰郷、再度上京した時には、生活の道を得るため牧場で働き、自立して本所茅場町で牛乳搾取業を営みます。

正岡子規の『歌よみに与ふる書』に感動し、根岸短歌会に入ります。明治三十三年発表の「牛飼い」の歌は出世作であり代表作です。「牛飼い」は牛乳絞りを生業とした自分をさします。五十歳で没しているから歌人としての寿命は僅か十三年に過ぎないが、後世に残る歌を多く遺し、この短い期間に「馬酔木」を経て「アララギ」を創刊し、門下から赤彦、茂吉、千櫨、憲吉、文明などの大歌人を輩出させます。自らは子規の写生歌を超えて全精神を傾倒した「生の叫び」を基調とする万葉調の写生歌を達成し、さらに「短歌連作論」をはじめ「言語のひびき」「言語の音声化」から「叫び」にいたる独特の歌論を確立させます。この間「新仏教」の同人となつて宗教と哲学の世界に遊び、茶人としても玄人の域に達しています。

砂原と空と寄り合ふ九十九里の磯行くらら蟻のごとしも

天雲のおほへる下の陸ひろら海広らなる涯に立つ吾は

おりたちて今朝の寒さを驚きぬ露しとすと柿の葉深

鶏頭の紅古りて来し秋の末や我れ四十九の年行かんとす

今朝のあさの露ひやひやと秋草や総べて幽けき寂滅の光

斎藤茂吉は、師左千夫の訃報に接し、その心境を

ひた走るわが道暗ししんと堪へかねたるわが道暗し

と詠んで、その偉大さを改めて讃えています。亀戸天神の近く

の普門院に伊藤左千夫の墓は戦火の傷をのこしたまま悠然

と建ちつづけています。

作歌の目・作歌の技法(第五十四回)

哲学をする短歌(七)

三木 勝

「哲学をする短歌」は1回で終わる予定で書き始めたのだが、書き終わるごとに次に書くべき部分が見えてきてここまで書き進めてきた。初めからここまで書き進める構想があったわけではないので、その意味では部分から部分へと発展していく随筆的・歌集的手法であったと言える。しかしこの回でこの論を閉じたいと思う。閉じるにあたっては、西洋哲学の手法である結論を置きたいと思う。結論を置くのであれば、今まで述べてきたことが、自明から自明へと渡渉して、ここまで辿り着いたと言えなくてはならない。この点については読者諸氏のご批評を賜わるほかはないであろう。この論はいかなる結論に向かうべきであろうか。この論の結論としては、短歌における個の表現から、その表現が、個の表現を超えて、普遍の表現へ向かう機能について考察し、それを持って結論としたい。

短歌は、個の感情と意志の表現である。短歌では個における感情の表現を踏まえて、個の意志が表現されていく。個における情感の表明なくしては、短歌は成立しない。と同時に、短歌の持つ最大の機能は、感情の表現を踏まえての個の意志の表現であることを忘れてはならない。長歌は叙事から情への昇華を目指す。連歌は、感情の共有・分有によって個々の感情が集団の中で、集団の中に融合していくことを目指す。

俳句は詠み手の個を捨て、ひたすらに対象を読むことによって、作者の精神が自然・宇宙に向かって開き、精神と自然・宇宙との融合を目指す。そしてこのことによって、作者自身
が救われ、充足していくのである。

短歌における個の感情と個の意志の表現は、どのようにして個を超えて普遍に至ることが出来るであろうか。あるいは普遍に至ることが出来ないであろうか。

ある作者の作品を読んでその読者が、その作者の感情や意志に共鳴していくのなら、そこには感情や意志の共有が見られるということである。共鳴するということはそこに何らかの共通項があるということである。その共通項がすべての人に共通するものであるならば、それは普遍的なものであると言えるのである。人の心の構造は、手足の構造がすべての人に同じであるように、人の心の構造も同じように出来ているのである。手足をどのように使うのかは、それぞれであるように、人の心の遣い方も様々である。人の心の中身は人それぞれであるが、人の心を動かしているものは、人の心の奥にある意志である。私たちは意志を自ら望んでそれを持つことを選択したわけではない。私たちが意志を持っているということは、私たちの意志を超えている。私たちが、私たちの意志を超えて、誰もが意志を持っているということは普遍的な事実なのである。

意志を持つ人間を創ったのは神で、神は神の似姿として意志を持ち、ベルソナ・位格(人格)を持つ者として人間を創ったとイスラム教やキリスト教は言う。仏教では大日如来を宇

宙の実相を体現した根本仏とし、一人ひとりの人間の中にも宇宙があるとす。このようにしてイスラム教やキリスト教、仏教には個々の人間の中に共通する普遍的な存在に関する概念がある。

では短歌においてそのような概念を見ることが出来るであろうか。短歌は個々の感情を読み、それを踏まえて個々の意志を表明するのみである。その点においては普遍性を持たない。しかし千年以上も読み継がれた歌を読み返していくときそこには明らかに意志を持つ存在としての人間が確実に浮かび上がってくる。しかし短歌それ自体では、なぜ人間は意志を持っているのか、その原因・理由・根拠を説明することは出来ない。兼好の言葉借りるなら「第一の仏」を説明することは出来ない。

「第一の仏」が分からなくとも、安心立命できる境地に、兼好は徒然草の掉尾において達した。「第一の仏」や神の概念がなくとも、人の心を旅し、自らの心をたどり、他者の作品を咀嚼することによって、己の心と同じ世界を見る。このことによって、人間が、人間の中における普遍的なものの存在を感得し、安心立命することが出来るのが短歌なのである。このようにして人は短歌において普遍に出会うことが出来るのである。普遍という先行概念がなくとも、自らの歌と先行歌の存在をたどることによって、人は普遍へたどり着いていく。部分部分の集積によって、普遍が見えてくる。これが短歌的世界の認識の方法である。

このように考えていくと、短歌における問題が、色々と見

えてくる。個と普遍の問題。普遍と仲間(ムラ)意識の問題。仲間(ムラ)意識といじめの問題。仲間(ムラ)意識と集団の形成。集団の形成からくる仲間(ムラ)意識の問題つまり排除の論理の発生。排除の論理と国家の形成。排除する国家と共生を目指す国家の問題。国家のあり方から国民主権の問題。国家主権の問題を言うならば、臣民から主権者としての国民への変遷の問題。この問題意識が、『第二芸術』をめぐる論争において論争された。『第二芸術』をめぐる問題は、私の中では超克されている。このことは別の稿で述べたことがある。このように、書き継がねばならないことが次々と見えてくるのだが、別の機会に考察しよう。ただ言えることは、これらの問題を考察するとき、西洋哲学的論理のみで、論証していくならば、なぜ西洋哲学による論証をしていくのか、なぜ西洋哲学の論証が必要なのか、日本文化の中では、論証されていない。この「なぜ」に答えず、「論証」という手段は常に正しいということを常識として無前提に「前提」とされていることが日本文化における現状なのである。短歌はその「無前提の前提」を問い返すのである。政治から遠くを歩く短歌は、政治も含め、日本文化も、世界の存在も含めて、その根本の「なぜ」の世界を旅する。「根本のなぜ」を問わなくなつた時、学問も文化も文明も疲弊する。この意味において、人の心を旅する短歌は学問・社会・文化・文明を健全に推し進めていく源泉を内包している。この意味において短歌は哲学の根源を旅している。短歌はムラ意識から出発して、その罅を開け、普遍への旅をする。(哲学をする短歌・了)

第十一回 太陽の舟短歌会 全国大会報告

原田 寛

平成二十一年度全国大会は六月二十八日(日)二十九日の二日間に亘って上総一宮の芥川龍之介ゆかりの宿ホテル一宮館で開催された。初日は雨となったが、成東の伊藤左千夫記念館と生家そして本須賀海岸さらに九十九里浜の高村光太郎の知恵子抄の詩碑を見学。二日目は歌会と講演会。六十八名の参加者を得て成功裡に終了することができた。

第一日(六月二十八日)

午前十時三十分千葉支部の面々が大網駅に集合する。遠来の客を出迎える準備。太陽の舟の紙プラカードや三角旗を用意。そして最後の資料の袋詰めをする。十一時三十分予定参加者全員が集合。一宮館のマイクロバス二台に分譲し成東に向かう。鮎真和食亭着ちようど十二時。早速、刺身天麩羅午前前に舌鼓を打ってから、雨の中、左千夫公園は省略して記念館へバスは走る。記念館では熱心なボランティアガイドさんの案内で伊藤左千夫の生涯を知る。記念館の次は、代表歌の「牛飼いが歌よむ時に世の中のあらたしき歌大いに起こる」

の歌碑のわきの生け垣を抜けて生家を見学。左千夫が愛した茶室「唯真閣」を覗く人もいた。

生家に別れを告げ、雨のため、これも予定していた食虫植物園はバスして、本須賀海岸に行く。岸辺に「天地の四方の寄合を垣にせる九十九里の浜に玉拾ひ居り」の歌碑が立つ。傘を差して砂浜を波打ち際まで歩く。左千夫を真似て美しい小石を拾うひとも見かけた。バスに戻って、平成天皇も宿泊したという「サンライズ九十九里」の近くにある「智恵子抄」の石碑に向かう。「千鳥と遊ぶ智恵子」の全文が光太郎自筆の拡大で刻まれている詩碑の前に立つ。「人っ子ひとり居ない九十九里の浜の砂にすわって智恵子は遊ぶ。無数の友達が智恵子を呼ぶ。ちい、ちい、ちい、ちい、ちい、傘をさしたまま誰かが声を出して読む。最愛の妻への光太郎の思いが偲ばれる。智恵子と光太郎と別れて、バスは海岸に沿ってしばらく走り雨のためこれも予定していた「あじさい屋敷」を省略して一路ホテル一宮館に直行。女将さんからの出迎えを受け、各人それぞれ



れ部屋にはいる。女将さんから「文ちゃん、僕はまだこの海岸で、本を読んだり原稿を書いたりして、暮してゐます」という長い長い手紙を書いた芥川龍之介の話を庭先の離れの「芥川荘」で聴く筈であったが、これも車軸を流すような雨で流れ、夕食の席で何うことに変更。

直ぐに「役員会」、つづいて「企画広報会議」が開かれる。六時から宴会。千葉支部の村田一江会員の琴「六段の調べ」の演奏で皆さんを歓迎し、三木企画部長の司会で和やかに始められた。高嶋代表の挨拶。女将さんの歓迎の挨拶と芥川の話。そして奥田岐阜支部長の乾杯の音頭。続いて各支部会員の紹介と活動振りの報告。楽しく



過ぎた二時間を北川会計の民謡で締めお開きとなった。二次会は各自の部屋で。

第二日目（六月二十九日）

朝から晴れわたった見事な天気。昨日と入れ替わって欲しかったと思う。しかし、それはそれ、好天に恵まれた朝、食事前に昨日見そこねた芥川荘を覗いたり海岸まで足をのびしたり九十九里の優雅な朝をすごした。

七時、バイキング朝食。八時二十分ホテルの庭で記念写真撮影。八時四十分。全国大会歌会を開始した。

松岡編集長の総合司会で進められた。先ず大会実行委員長の原田支部長が開会挨拶で多くの会員の来葉を謝した。続いて、大会委員長の高嶋代表が阿部正道先生の忌日にふれさらに太陽の舟を発展させたいと挨拶した。

歌会は十二時までに終了することを目標に、前半を原田事務局長が担当し、後半を三木企画広報部長が担当した。選歌したひと一人、しなかった人ひとりがコメントして、高嶋代表が評をする。最後に作者弁、という順序で手際よくすすめられた。時に厳しく、時に笑いありと進行し、十二時十五分終了した。高得点者は次の通りであった。

第一位 黒羽 絃子

今われに不足あらねどしのびくるこの孤独感しずもる部屋に
第二位 鈴木 燾子

がん治療越えて余命に花浴びて瘤持ち洞ある幹に手を置く
第三位 原武 寿子

こだはりのちがふ二人が共に居て四十年も連添ふ人間の不思議さ
多くの秀歌のなかから右三会員の歌が上位に選ばれた。

講演会

一時十五分須藤宏明盛岡大学教授の「《眼》を重視する阿部正路」と題する講演が開始された。講演の骨子は次の通り

である。

冒頭に阿部正路の歌二首「少しずつ距離を保つのが愛情である鷹匠松原さんが男の眼をす」と「鶴一羽高く澄みゆく君こそは吾の中なる金色の鷹」を引き《眼》と《距離》を指摘した。

本論に入り『長谷川泉著作選』（第一巻）の月報に阿部正路が書いた「眼光の鋭さは」の「長谷川泉先生の眼光の鋭さは、まるで深い湖のように、おだやかに、蒼く澄んでゆくのだった」はまさしく阿部正路が着目した《眼》であり阿部自身の《眼》であったとする。次いで『戦後文学論』（桜楓社）に阿部が書いた川端康成の《眼》を取り上げる。「川端康成の表情の特色はその《眼》にあった。この《眼》でこの世の人も風景を見つとした」と評する。また川端のエッセイ《末期の眼》にも阿部は注目し、『十六歳の日記』『禽獣』『雪国』にも《末期の眼》は鋭くつらぬかれていたとする阿部を指摘。また『禽獣』で表現されているのは、「冷徹の美」であるとした河野多恵子を援用する。おわりに、阿部正路は人間を含めたあらゆる自然現象の内奥をみようとし、阿部正路にとって短歌を創ることも、文学作品を研究し



批評することも、その基盤には写実する冷徹な《眼》がある、そしてあたたかな《眼》がある、と須藤宏明教授は愛する師の阿部正路を評し、今年の講演で新しく、「阿部正路は研究者というより批評家であったのではないか」と結論づけた。須藤教授は新しく刊行される『川端康成作品集論集成』の第三巻『禽獣』『叙情歌』の『禽獣』の項を執筆される。出版が待たれる。

表彰式

太陽の舟賞 石塚 立子
功 勞 賞 山 名 恒子
特 別 賞 長 沼 温代
松 本 啓子
山 田 田鶴子

努 力 賞 岩 橋 千代子
伊 藤 モト
小 林 絢子

新 人 賞 富 原 澄枝
土 方 澄江

代 表 者 賞 武 田 節子
黒 羽 紘子

東 京 文 芸 館 賞 鈴 木 熹子
高 得 点 賞 第 一 位 原 武 寿子
第 二 位 第 三 位

右の方々には表彰状と記念品がそれぞれ贈られた。

運営懇談会

運営懇談会では、役員会で石塚立子会員（柏支部）が役員に選出されまた、会則第10条に「なお役員は原則として全国大会の役員会で改選する」を追加することが決定したと報告があった。

秋の吟行会が岐阜支部主催で十月二十五日（日）～二十六日（月）下呂市小坂町湯屋温泉奥田屋で開催されると奥田岐阜支部長より連絡があった。

また、三晃社ならびに月の船支部から大会に寄付があった旨の報告と謝辞があった。

高嶋代表の講評と原田実行委員長の閉会の辞があり三時五十分散会しホテル一宮のバス上総一宮駅まで送られて帰途に着き全日程を終了した。



全国大会受賞者 十首

太陽の舟賞

石塚 立子

客人まろとに優しき雨の降る午後を浜昼顔はやはらかに閉す

雨なれば雨のものなる砂浜の先なる雲に昏き波の間

沖とほく見える波間に漂へる不羈の心も落ちたる夢も

合歓の花しづかに紅を増す夕べ雨音はづか高くなりゆく

一夜降る雨に散りしく花合歓の哀しみ薄く紅に残しぬ

雨音も風音も止む夜の空かすか星影の一つまたたく

眠らざる波のよせくる九十九里 ビーチグラスは夜を研がれぬ

海よりの風は朝日に耀ひて黒松林に夏透きとほる

透明のグラスに香る汲む酒に重ねる夏のゆずの涼しさ

故郷は山深き故まなうらに広がる海は常なきてをり

功労賞

山名 恒子

ほの暗き雨雲の下重き波九十九里浜只中に立つ

天と地のあはひ九十九里町浜寄する波引く引く波音の静かに重し

彼方まで続く微粒の砂を踏み踏みてやさしき波打ちに会ふ

寄す涛の響き足裏に伝はるか素足となりて大地に立てば

たはむれに掬ひて舐むる九十九里の潮ほのかに甘味を持てり

サーファーの足跡馬の蹄跡わが靴跡も間もなく消ゆる

六月の太陽の舟今まさに九十九里より漕ぎ出ださむよ

龍之介ゆかりの宿にアララギの茂りて浜木綿株太く咲く

裏庭に高く咲きゐる桐の花左千夫の生家にひっそり似合ふ

目と耳の翫そぼだつ歌会琴の音に聴き入る宴すべてに感謝

特別賞

長沼 温代

テレビに見し天安門の広場立つガイドの説明暑き陽の中

築山に太湖石積み溪谷を思はする庭そぞろに歩む

庭園にをちこち置かれし太湖石それぞれ違ふ表情のあり

長々と壁の上部を波打たせ龍に模したり庭を見守る

留園に胡弓の調べ流れをり古へ人を思ひて歩む

順追ひて窓枠に見る庭園の少し異なる楽しき見方

地下宮殿未だ掘られてゐるといふ人馬の像に個々の顔あり

造らせし職人達は生きられず地下宮殿の秘密を守る

兵馬俑掘り当てし人直接にサイン貰ひて外に出たり

休みつつ人に従い登り行く万里の長城八達嶺を

特別賞

松本 啓子

六段の琴にはじまる千葉歌会潮ひたひたと太陽の舟

「砂山の弘法麦に浜防風」芥川とあるく上総一の宮

ほのぼのと咲くねむの花帰り来て芥川は書く「文ちゃん」への文

芥川泊りし宿にふさはしき女将よりとどく手書きのあいさつ

茅葺きの軒ばしたる雨しづくここに立ち左千夫は思案せるにや

里を捨て本所茅場に牛を飼ひ短歌創り出す面魂は

君塚さん盛丹さん鈴木薫子さんへてうれしき誌上の友に

大洋に旭の出づるときめきを九十九里浜思ひ残して

侍り来し夏の大会 師の友の今日につながる記憶鮮らし

あらためて千葉の名はよし万葉をつなぎうたはな千葉の舟人

特別賞

山田 田鶴子

千駄堀の湿地おさめに掘りし池集めし水に湿原かわく
万緑の沼地に一樹枯れてをり広げし枝に真水欲りたり
風雪に痛手は深くなほも立つ洞を穿ちし樹のいとほしさ
湿原はくらぐら深しひっそりと浦島草が長き穂ゆらす
宙を掃く細きつる穂のとっぱなに縋りてをりぬ蟻が一匹
育みし紅、黄の睡蓮深く水面沼の底ひは密に冥し
池の面の深き木陰に群てをり魚の動きに小さき波たつ
遣り水の澱に菖蒲はなを終へつつんと立つ風なき空に
切り株に木の虫食みたる造形美虫の裁月思ひてなぞる
地の上の太根を晒し古へを黙して告ぐる標の大樹

努力賞

岩橋 千代子

そよともせず庭木もいまだ深眠りほの白む窓に小鳥らの声
鳥の声混じるメロディーラジオより流れて体活気満ちくる
雨催ふ午後を連れ舞ふ黄の蝶に暫しうつつのうさは遠のく
時計すでに五時を指せとも日は高く葉むら照ら照ら今日は真夏日
六時よりまた一まわり草むしる夕風たちて体軽きに
雨粒をためてさやかに咲き初めし紫陽花の穂日毎増えゆく
摘むときのたのしみあれば茗荷の芽野放図なるもの目瞑りて待つ
師走より咲きつぐ鉢のシクラメン六月半ばの話題賑はず
読める字のありて前後をつなぎゆく古文書資料に刻を忘れて
広げたる本の活字を目で追ひつつ脳に届かぬ折々のあり

努力賞

伊藤 モト

ポケットにやと押し入れし小銭入れ運賃足りぬかまた出す老女
かすかなる風の吹きおる用水路葛の葉サワサワリズムを取りて
梅雨さ中降ったり止んだりの予報なり仕事の往復降られ切なし
孫生まれ娘一家の逗留も帰りて三日寂しさ増しぬ
四日ほど会わぬ間の成長の生後七十日幼児のような
束の間の日差し見つけて布団干し代わる代わる子らが来るらし
昼近くおはよう何て電話来て三十路に成りしと礼いう息子
夏野菜届けてくれる人の居て夕餉に美味しく鴨焼き戴く
梅雨空にざくろの花のポトポトと朱色に染まる留守宅を掃く
一人居の土曜の夜のしんみりと突然激しく雷雨の音の

努力賞

小林 絢子

梅雨晴れのひととき惜しみ開け放つ窓よりしるく十葉匂う
奔放と敢えて言はんか青桐の空割しつつ伸びる若枝
庭隅の山百合の蒼太となに温めいん白きその裡
ほつほつと浮かぶ記憶の様に似て梅雨の晴れ間を咲ける昼顔
幸せがかすんで見ゆる雨の日はハッピーネスクローバの一鉢を
花房と成りゆく箇所かアカシアの木末ひかれり風立つたびに
初夏の光の斑かと思はゆにはや咲き初めしアカシアの花
アカシアの小さき花々見しほどにやさしきことをやさしく思う
ゆとりなく過ぎしひと日と仰ぎ見る桐の筒花花裡ほの暗し
「売物件」の文字隠しつつ紫陽花は人住まぬ家に色深めゆく

新人賞

富原澄枝

東京文芸館賞

武田節子

木道を八十キロの荷を背負い陽焼けの顔は精悍なりや
背丈よりはるかに嵩の荷を背負ひひたすら前へ山小屋めざし
水芭蕉お化けのような葉をもちて生活配水尾瀬もいたわし
至仏山雪溪残し初夏となり行き交うハイカーあいさつ交し
明けやらぬ尾瀬の湿原ひんやりと紐締めなおしさあ出発だ
湿原に白き綿毛フワフワと雲雀囀り果穂ゆれり
エサ求め人に寄り来る山鳩よせめて君らは野性でありや
新築の我が子の庭の夏すみれいも苗三列砂場もありて
新しきカーテン揺らす風わたり幼とび跳ね春のひとつき
水色の園服姿の三歳児少しはにかみ待受画面に

代表者賞

土方澄江

高点者賞 第一位

黒羽紘子

梅雨晴れに庭木の手入れ夫と共風吹き抜けて出来栄え上上
新芽吹き仄かに香る梔子の主無くとも我が庭に咲く
更地には雑草避けにとカボチャ植へ北国の種すくすく育ちぬ
徐徐と収穫したるカボチャなり恐る恐ると味付けをする
夏野菜今年は鹿が来ないのでにカラスの襲撃格闘の日
手造りの梅干とジャムブレゼント売りに出せると友からの賛辞
紫陽花の挿木のポット名前付き友より頂き芽吹くは何本
エコカーテン二階のベランダ網張りて階下より這わす朝顔の蔓
マグカップ九頭の馬描かれて上手(馬九)行くよと午年の吾れに
吾が恩師墓参を兼ねたクラス会墓前の合唱応援歌なり

あせらずに勤しむ今を歌に詠み笑顔と感謝の老いを生きたし
かりそめの気持思へど苦しみは決心次第恋のかけひき
さよならと静かな月夜の砂浜にせつなき恋の葬送をする
ただ直に誓ひの言葉つぶやきし天の采配永久に変わらざ
鳴きもせて庭にカラスのぬれば色猫見るとなくのっそりと立つ
茫茫と天地分かたぬ九十九里の波頭におどるサーファーの群れ
あられもち煎るがにおどるサーファーの浮き沈みする海は茫茫
雨の中見放く海原サーファーは海に立つがに浮き沈みする
空と海雨にとけゆく九十九里の長き砂浜の淡き風紋
忘れ得ぬ面影追へど海は唯うねり揺蕩ひ波打ち寄する

紫陽花の百株ほどが咲き揃うわが独り居の屋敷を染めて
わが家の一畝がほどの花菖蒲むらさき深く咲き盛るなり
初咲きの菖蒲を夫の供花とする朝の遺影は笑まうがごとし
南天の小花に寄り来る群れ蜂の羽音するなり静かな真昼
野の草を過保護に育てて今年またほたる袋に百の花咲く
短歌ひとつにかかりながら容赦なく生える屋敷の雑草引きぬく
振り返るとまとてなき日々の過ぎ今年も多にサルビア咲きぬ
今朝咲きし百合ふたつ相寄りて恋人のごと日の暮るるまで
朝顔の蔓の行方は定まらず自在に伸びて風に揺れおり
無職われ妻でも嫁でもなき日々を気ままに短歌を詠みゆかんとす

高 点 者 賞 第 二 位 鈴 木 薫 子

朝もやの温き気圧の房総の浜辺の松もねむたげな初夏
砂浜は数多の潮吸い集め素足でかける児等の声きく
白銀の塩っぱい砂に寝ころびて夢をいだきて半世紀過ぐ
おめでとう!!七十余春を寿し養老川の竹馬の友に
バイトの子のルール通りの挨拶もかわいい少女のこほれる笑顔
損得をとっさに読みて守りしも他人の働き読みきれぬひと
伯母さまの一世を紡ぐジグソーのパズルの夜は溪谷のはな
見上ぐれば万朶のみどりの傘の中妣に伝うる六月みそか
洗髪の流るる黒き二十歳の日の記憶けづりつ白髪に告ぐ
庭の陽の傾く気配漂いて寝転んで読む本をふせたり

高 点 者 賞 第 三 位 原 武 寿 子

天と地をつながごとく大海の波の寄せくる重たく強く
潮騒のかほる本須賀の海辺より天をあふげる心無にして
オカリナと琴の音色にさそはれて口ずさみたるふるさとの歌
明けそめし一の宮川によしきりのさへづり高く水面にひびく
早起きの友にさそはれ浜へ行き碧き朝風奥深く吸ふ
九十九里の浜に続ける小径には固き風紋ひそと残れり
ひとつふたつ貝を拾ひてわくわくと童にかへる時も忘れて
酪農に生き歌に生きたる伊藤左千夫葉葺き屋根の静かなる生家
久々に歌友と集ひなごみたる庭の合歓木はんなりと咲く
頬なでる潮にほふ風清すがし横隔膜の大きく動く

小泉千樫のこと

千葉支部 吉田 昌夫

このたび全国大会でその生家を訪ねた伊藤左千夫の教えを受け、苦境を超えて清澄な歌境に達したといわれる千葉県の生んだ歌人に小泉千樫がいる。明治十九年九月安房郡吉尾村に生まれる。昭和二年八月に四十二歳で死去。

伊藤左千夫は、芸術の道、歌を作るということについても、新しい題材を採ったり、殊更に想を構えたり、語句の配列に苦心したりすることなく、日々の何でもない生活のなかで感興を起すようにすればよい、と教えた。千樫はこの教えに共鳴した。千樫の生家にある歌碑には

みんなみの嶺岡山の焼くる火のこよひも赤く見えにけるかも
の歌が刻まれている。高崎代表が住む鴨川の自宅からこの嶺岡山を望むことができる。

また次の歌は鴨川の汐入公園に碑となって立つ。

菜萁の葉の白く光れる渚みち牛ひとつつゐて海にむき立つ
千樫は小学校では秀才と呼ばれたが貧しい農家に生まれ育つたため、進学出来ず、小学校の助手の後に教員講習所に学ぶ。苦学のすえ道を拓いていった。

背戸の森椎の若葉にあさ日てり一人かなしも来し方おもへば
千樫の来し方の苦しむと喜びは青春の憂情であり、歌は平淡から清澄へと移っていったのである。

小泉千樫の名も永く房総短歌史に残ることであろう。

全国大会題詠「海・波・砂」二首

相羽照代

引き潮の波紋残れる砂浜をひとり歩みぬ五月雨の中
沖つ波逆巻きて遠く何嘆く敗残の兵をりしと叫ぶ

石塚立子

風紋に音なく雨の降りそそぎ砂の埋めゆく沈黙の刻
遠浅の浜に漁る人の待つ鎌の刃先の波間にひかる

伊藤モト

梅雨さなか九十九里の浜に来し波乗り若者きよは寒しと
引き潮の遠浅浜の水辺まで傘差し歩む歌友と共に

岩橋千代子

うねりくる波の間合にふと颯つは海彦神か朝日きらめく
しつとりと雨を含みて砂浜の風紋固し足跡はばむ

上田やい子

雨煙る九十九里浜悲し色癒しくるるは歌友の笑み
恋心抱きてさ迷う砂浜は波音さえも狂おしきかな

奥田清

能州を防波堤なし富山湾波穏しくてしずもる旅愁
「雨晴し」義経伝説想ひつつ「磯はなび」てふ宿に波聴く

加藤かず子

砂に書く亡夫の名すーっと消しゆきぬ悪戯好きな波の手のひら
今あらば海幸垂らす君に添い荒磯に憩う再びもあり

川村貴美

海近き龍之介宿りし庭に咲く合歓の羞しさ文への恋文
梅雨ぐもる空に響動す潮騒の低音君の声とも聞こえ

北川昭

盛り上がり乱れて崩れ寄せる波よどめる胸をかき混ぜりつつ
彼方よりつきぎ崩れ寄せる波大恐慌の迫るがごとし

久保田昭江

引き潮の九十九里の海遙かなり歌友と歩む足跡つけて
波乗りの若きら遠く浮沈なし黒点ともなり生命遊ばす

黒羽紘子

九十九里の広き海原帯なして白き波がしら幾重にもたつ
波がしら白く崩るを兎跳ぶとも歌友と見ており九十九里浜に

河野静子

空と海うす墨色に境なし貝のいろいろ浜を彩る
荒波は遠くに見ゆる砂浜のくぼみの水に貝を洗ひぬ

志賀倭子

小雨降る九十九里の海盛り上がり巻き込む波に黒きサーファー
母の字を内包する海広らなり浜に寄りゆき波と語らふ

庄司久恵

波打たぬ濡れ砂続き水踏めばここより海よ 九十九里やさし
灰色の濃淡の景遙かにて雨天のめぐみ九十九里浜

末次房江

海のなかに遙かにつづく砂濡れて波の残せし桜貝ひとつ
幾年を波のあらひし骨片に星の紋章残してヒトデは

鈴木 熹子

一握の砂を開きし十代のうたにひかれて老いを読みつぐ
房総の海に稲田に雲あつく六月みそかに歌人集う

菅谷 孝子

雨の中九十九里とふ海岸を歌友と共に傘さし歩む
宿を出て海辺を歩み帰りたればはまゆうの花われを迎えり

杉山 直子

磯蟹の爪をふり上げ九十九里・足折られし蟹人に踏まれゆく
梅雨空の悩む自分に疲れたら九十九里浜歩くことを薦め

鈴木 愛実

目を閉じて波の音きく心地良き九十九里浜梅雨晴れの朝
初夏の朝ベーカー押して浜辺ゆく海の匂いに心しずまる

高崎 邦彦

朽ち倒る浜小屋の奥死体無き漁師祀りし祠も朽ちる
波音に遠くなりたり埋立ての奥に漁師の祠草生す

多久和 玲子

海近く育ちし左千夫豪気なりしと雨の中歌碑黒き影もつ
雲垂るる海模糊として波高しサーファーの頭見え隠れせり

武田 節子

初めて来し九十九里浜打ち寄る波茫々雨の只中
濡れながら空と海との界なくうねる波濤に声なく見惚る

角田 順子

歌人らと一夜を過ごす一の宮海風はこぶ松のささやき
九十九里わが胸裡をのみ込みて大波小波こころ揺さぶる

照山 好子

くだけたる白き波間にみえかくれ波乗り遊ぶ人影幾つ
海鳴りはいつしか昨夜の合唱の琴とオカリナ響もしてゆく

富原 澄枝

九十九里砂原と空は寄り合いて雨の浜辺に歌友ら戯むる
九十九里木の間隠れに見ゆる海合歓の紅色あえかに揺れり

月田 藤枝

サーファーの肢体刃となり雲垂るる九十九里浜の怒濤切りゆく
茅葺の厚き温とさ去りに日を伊藤左千夫の踏みにし土あと

富永 道子

遠浅の浜に潮のにじみ出る足跡つくる旅の証に
九十九里の海に向ひて叫びつつひろげし大手いともかはゆし

中村 陽子

風紋のやさしき象おほうみの風の歌へる楽譜晒して
引き潮の浜辺の広さ九十九里洗ひ盡くさる細の砂は

永野 昌子

ごーごーと海鳴り聞こゆ渚にて我を引き行く波の彼方へ
寄する波犬吠崎は見えすして誰つくりしや砂山に波

二反田 實

海山も田畑も見へし山武とふ左千夫の心我が身に植ゑる
大波はわがかんしゃくのつきづきしをだやかに見る今朝のさざなみ

原武 寿子

雲間より光る朝日の見えかくれ波打ち際で深く息吸ふ
大波も小波となりて足もとに広がりてくる九十九里浜

原田 寛

三十年過ぎてしまった弟と酒に唱った「われは海の子」
風吹く日母に叱られ海岸で碎ける波の行方を追った

土方 澄江

砂浜に鏝められし貝殻の天然の美はダイヤにまさる
引き潮の遙か彼方にサーファーは霧に包まれシルエットなり

深谷 幸子

白波の九十九里浜の風紋に足あと残す曲線見つつ
波寄せる九十九里浜あしもとに海星ひとでの残骸砂を含み

深谷 充代

前線の影響強きにかかはらずサーファー達は浜に群れるる
拾ひきし貝殻一つを耳にあて遠き潮騒しばし聴きある

福地 啓子

波音を遠くに聞きて歩を早む九十九里浜徐々に明けゆく
三步四歩風切りてゆく砂浜に過去となりたる足跡つづく

藤井 武徳

故郷の海に向かいて心地よく風も優しく言う事なしや
父の海岩に碎ける波に向かい叫んだあの日はや五十経ちぬ

堀井 英範

すべり終え砂浜のぼるサーファーのボード抱く腕たくまじきかな
のどかなり湾は霞みて波際に釣り竿の立つ検見川の浜

松岡 三夫

九十九里そぼ降る雨にわれは見し伊藤左千夫の玉拾ふ背
波聴こゆ所縁の宿に龍之介偲びておりぬ若き日の恋

松本 啓子

梅雨じめる砂浜はるら九十九里波打ち際にたどり着きえず
足もとも体もぬれてさみだるる九十九里浜立ち去りがたく

丸山 孝一郎

海広く曇りの底に風紋と足跡描くモザイクの浜
九十九里激しき波を乗りこなすサーフィン知るや古き歌人

三木 勝

沖津にてかすかに生れし白波のならびならびつ陸に寄せ来る
人残す足跡すべて消し終えて波の白きの引き返しゆく

宮島 マツエ

海開き神事のあとの海浜は光のシャワーで人らを包む
九十九里の浜に集う六十余名さざ波のひかり風紋のしらべ

村田 一江

たぶたと打ち寄せる波大洋の岸辺の砂を銀色に磨く
灰色の空と海とが重なりて雨の九十九里高波白く

村田 孝子

雨あとの残りし生け垣隅砂に夕べを咲きし合歓の花伏す
さくさくと昨夜よべの雨あと庭砂に踵深きの歌びと誰れぞ

森 五貴雄

粉々によせては返す白波の砂浜濡れる思惟の末路へ
雨止まず心を洗うがごとく波寄せかえる茫茫したる太平洋

八代 陽子

うねる波九十九里浜黒き点波間に出でたちサーフィンはじむ
干潮の渚はるかに鈍色ちんしよの空とけあう海を見つめる

山田 紀子
うすものの上着を通す海風は過ぎにし恋の傷をさいなむ
鈍色の海と空なり長梅雨にのっぺらぼうな九十九里浜

山田 田鶴子
九十九里の海に降る雨たえまなく永遠へと続く潮騒をきく

山田 玲子
浜木綿の百重が咲ける砂丘を夏の陽射しが容赦なくさす

山名 恒子
朝な夕言葉つなぎて行くべしとひそかに誓ふ太陽の舟に
九十九里小雨に煙りはるかなる海岸線は薄墨色に

山本 賀子
渚打つ波さらさらと鈍き陽をさらひてゆける九十九里浜
はるかなり九十九里浜広らなり浜の真砂の一粒の吾れ

吉岡 悠紀子
空と海雲たれこめて際もなしサーフィンの子等日曜の昼
潮引きて波跡描く砂浜の見晴るかす遠浅一宮景観

吉田 昌夫
サーフィンの若者見ゆる浜に立ち磯の香ふくむ潮風を受く
どこまでも続く砂浜九十九里海水すくひてそと舐めたり

梅雨入りの遙かに煙る九十九里船影を背に寄せる白波

渡辺 幸子
早朝の荒波寄する一の宮もまれ転びてもサーファー飽かず
九十九里の海原ゆらゆら迷い来て鯨傷つき命の尽きぬ

出 席 7名 出 詠 7首

六月二十八・二十九日、本年度の全国大会が開催されます
ので六月の例会を八日に繰り上げました。いつもより出席者

歌会報告

洪谷支部 支部長／志賀 倭子 (丸山記)

日時 5月9日(土) 10時～12時

場所 きゅりあん(品川区立総合公民会館)

司会 丸山孝一郎

出席 一〇名 出詠 一〇首

久しぶりに大勢の参加者が集まり、賑やかな歌会になりました。各自出された出詠歌を一同で丁寧な推敲。なかには皆さんからいろいろな批評、助言がありました。作者でさらに検討するように宿題になったものが二例ありました。

また五月号の七首詠のうち河野さん佐伯さんの歌の内容について意見交換が行われました。

参加二度目の岡崎くにさんの出詠。

・長女よりゆづられし服びったりとウエスト直さずはける
ハッピー

(川村記)

大田支部 支部長／庄司 久恵

日時 6月8日(月) 13時～16時30分

場所 大森山王高齢者センター

司会 川村 貴美

出席 7名 出詠 7首

六月二十八・二十九日、本年度の全国大会が開催されます
ので六月の例会を八日に繰り上げました。いつもより出席者

が少なかつたのですが三木先生がおいで下さり作歌のご指導並びに作家の目・作歌の技法についてお話し頂きました。

・次男と共にホテルの食事摂りあつた夫の話に笑みこぼれたり

ご主人の四十九日の御供養のあと二人でホテルで食事をなさった由、暫く振りで先月から大田の例会に出席して下さっています。

水戸支部 支部長／長須 正文 (深谷記)

日時 6月14日(日) 13時～16時

場所 びよんど(男女センター)

出席 9名 出詠 12首

司会 塩田 秋子

歌会に入る前、長須先生によるミニ講義、「歴史遺産に学ぶ近現代の秀歌」を勉強しました。今月の歌人は岡本かの子でした。九名の出席で歌会は楽しくいい歌が揃いました。

・くろぐろと雛の寄りたる吾の手を久に帰省の息子はみつめをり 原武 寿子

水戸支部 支部長／長須 正文 (深谷記)

日時 6月21日(日) 10時～12時

場所 岩間公民館

出席 7名 出詠 10首

司会 岩橋千代子

雨の日にも七名の出席で、全国大会の時間等の連絡などを話し、歌会に入りました。一首一首を歌評し充実した歌会に

なりました。

・せわしなく葬りも終り逝きし娘の歩める道を仏間にしのぶ

鶴来けい子 (末次記)

柏支部 支部長／末次 房江

日時 6月19日(金) 12時30分～15時

場所 アミューゼ柏(B)

出席 11名 出詠 24首

司会 末次 房江

貴重な梅雨の晴れ間のひととき、ほぼ全員が参加して、心のこもった歌会をもつことが出来ました。

感性豊かな歌、心を打つ歌を鑑賞し、又、表現の仕方、言葉の使い方を考えあつたり、実り多い歌会でした。

・陽にかざすラムネの泡の透明にシュワシューワと梅雨の晴れ空 石塚 立子

・物語おさなの胸にきざせるか独り言葉に独り遊びす 末次 房江

雨降り地蔵 森 五貴雄

どんよりと仰ぎ見る空 白鷺は羽を広げて夢に酔う

梅雨季の紫陽花雨にうたれおり紫色はますます映えゆく

沿線の緑が雨にとけてゆく夜行列車は闇にあかり灯して

雨が降る路傍の角の地蔵さま 小さな小屋で雨やどりかな

ワイパーの勢い増して雨弾き見知らぬ街がぼんやりのぞく

月あかり吾影追いて歩みゆく追っても追っても逃げて行くなり空梅雨に土の乾ける丘の畑花かると馬鈴薯のさく